文化の力で大阪に活力を。

OSAKA*文化力

No.105
2009 SPRING・春

FRONT INTERVIEW
水都元年・新たな活力の創造へ。
北川フラム（水都大阪2009プロデューサー）

PREVIEW
「水都大阪2009」＆連携・恒例イベント

OPINION TALK
緊急特集・21カフェ拡大版
「大阪文化の灯を守ろう！ 2009大阪文化の行方を語る」
武田佐知子・田中 宰・萩尾千里・佐藤徳夫・春野恵子・堀井良殷

財団法人 大阪21世紀協会

関西から文化力
POWER OF CULTURE

Front Interview

水都大阪2009プロデューサー　北川フラム氏に聞く

北川フラム（アートディレクター）
1946年新潟県高田市生まれ／東京芸術大学美術学部卒業
アートフロントギャラリー代表、地中美術館総合ディレクター、新潟市美術館館長、女子美術大学美術学部教授、愛知県立芸術大学美術学部客員教授、京都精華大学芸術学部客員教授
2000、2003、2006年「大地の芸術祭：越後妻有アートトリエンナーレ」総合ディレクターを務める。
・2003年 フランス文化省より芸術文化賞シュバリエ受勲、ポーランド政府より文化勲章受勲
・2007年 芸術選奨文部科学大臣賞受賞（芸術振興部門）、国際交流奨励賞・文化芸術交流賞受賞（国際交流基金）
著書「希望の美術・協働の夢 」（角川学芸出版）

大阪都市再生に向

水都元年・

来る8月22日から52日間、大阪復興のシンボルイベント『水都大阪2009』が開催されます。アートの力と市民参加で大阪の都市再生のきっかけづくりを目指すこのイベントでは、「水の都」の潜在力がいかに生かされ、アートがどのような役割を果たすのでしょうか。プロデューサーの北川フラム氏に聞きました。

表紙の人 ／北川フラム（きたがわ ふらむ）氏

け、アートと市民パワーを結集！

新たな活力の創造へ。

芸術（アート）感覚を呼び覚ます

芸術は音楽と違って、「好きか嫌いか」ではなく、「分かるか分からないか」で判断されがちです。これは日本特有のもので、芸術を理解すべき対象にしてしまったのは、明治の日本の近代化政策にも一因があります。

明治初期、岩倉具視率いる欧米使節団を契機として日本の近代化が加速し、官立の美術学校や美術館などがつくられました。そして国家は、そこに展示された絵画や彫刻などを指して、これが芸術だといってしまったんです。以来、人々にとって芸術は美術館で鑑賞する何やら立派なものとなり、先祖から受け継ぎ楽しんできたお祭りや大道芸、着物、庭、食べ物などの生活文化を、芸術の領域から除外してしまいました。

しかしこれこそが間違いのもとでした。『水都大阪2009』では、まずはそうした生活の佇まいや人々が興味を引くものを芸術の概念に含め、さまざまな体験を通して生活実感から離れていた芸術感覚を呼び覚ます。そうして自分たちの文化の良さを再発見し、水の都大阪の魅力を皆で楽しみます。

都市再生にかかわるアーティスト

芸術というのは極めて人間的で、しかも赤ん坊のように非常に手のかかる活動です。だからこそ自由な可能性をもっており、芸術を媒介としてさまざまな人や組織とつながることで、土地固有の文化が創造されるのです。例えばフランスのナントというまちでは、市長が芸術文化によるまちづくりを掲げ、まちの中で巨大な人形を動かしたり、青空クラシックコンサートを開いたり、歴史的価値のある菓子工場をレストランつきのアートセンターとして再利用するなど、さまざまな文化施策を推進しました。そうしてまち全体が元気を取り戻し、多くのIT企業がナントに移転するなど、経済の活性化も促進されました。また、ガウディやピカソで知られるバルセロナ（スペイン）、歴史的街並の保存で観光集客力を高めたボローニャ（イタリア）、さらにはアジアの各都市においても、グローバルスタンダードの潮流の一方で、文化都市としてのアイデンティティーをもって固有の文化力を磨こうと努力しています。アーティストは、そうした都市再生に大きくかかわっているのです。『水都大阪2009』に参画する芸術系団体も、大阪の苦しい財政事情をよく知った上で自分たちのネットワークを駆使し、都市再生に関わろうとしています。まさに大阪の伝統である「市民の力」を感じます。

水の都大阪の魅力を体感

私は、大阪とは20年来のつながりをもっています。2007～08年には、大阪から世界に向けて文化・美術情報を発信する『大阪・アート・カレイドスコープ（大阪府立現代美術センター）』をプロデュースしました。そうした縁で、今回『水都大阪2009』をお手伝いさせていただくこととなりました。

大阪を知るようになって、とても好印象なことがふたつあります。ひとつは、組織より個々の人間のつながりで仕事が動くこと。大阪は人と人のつながりをとても大切にし、人々のまちに対する熱い思いを感じます。もうひとつは、都心部に滔々と流れる川の存在です。大都市なのに一歩川辺に出ると、広々とした空があり、風があり、波間に魚が飛び跳ねる。まさに得難い自然の資産です。

この大阪の水辺こそは、都市再生の力になります。『水都大阪2009』では、都心を回廊する川をクルーズしたり、船着場から水辺の楽しみを発信したり、中之島でもアートをテーマに市民参加によるさまざまなワークショップを行います。また、多彩な水辺の景観を楽しめるよう、夜間の灯りプログラムにも工夫を凝らします。『水都大阪2009』は、こうして水の都大阪のさまざまな魅力を知り、体感し、発信することを目的としています。

まちを磨き、育てる活動

『水都大阪2009』が開催される今年は、大阪が水の都としてのアイデンティティーをもって歩み出す、まさに“水都元年”です。これを契機にまちを磨き、まちを育てる活動を継承していくことが、大阪の都市再生を加速させるでしょう。今後は中之島を水の都大阪のシンボリックな場所として位置付け、ここからさまざまな芸術文化を発信することも考えられます。

「花の都・パリ」といわれますが、芸術活動をしている人たちは全てフランス人ではありません。しかしパリのアーティストといえば、皆フランス人だとイメージします。つまり、まちのイメージは、そこで何かをする人たちの存在によって決まるんです。大阪で活動する人は、誰であろうと大阪ファンであり、大阪人なんです。

現在、大阪にはハイレベルな活動をしているアート系団体やNPOがたくさんあります。『水都大阪2009』をきっかけに、そうした人たちが水辺を共通のプラットフォームとして出会い、あるいは連携することで、創造都市としての発展が期待できるでしょう。中之島がパリのような存在になっていくのです。

2009年、水辺が変わる、

水都大阪2009
AQUA METROPOLIS OSAKA 2009

2009.8.22（土）～10.12（月・祝）

明日へつなごう、まちづくりムーブメント。

水都大阪2009実行委員会
事務局長　室井　明

大阪では今、世界にも稀な都心部を囲む川を「水の回廊」と位置づけ、船着場の整備や橋のライトアップなど、川や水辺の賑わいを取り戻すさまざまなプロジェクトが進行しています。『水都大阪2009』は、そうした水の都・大阪の復興を広く伝えるシンボルイベントです。折しも今年は、大阪の生命線である淀川の改良工事竣工から100年目。中之島公園整備や八軒家浜整備、ほたるまちオープン、京阪中之島線開通などによって、水辺の景観も美しく生まれ変わる、まさに“水都元年”です。そうした記念すべき年に開催される『水都大阪2009』。これを契機として、私たちは「水の都・大阪」再生に向けたまちづくりムーブメントを起こし、文化の力で大阪のまちを元気にする運動を続けていきたいと思っています。

主催 水都大阪2009実行委員会
（会長 平松邦夫大阪市長）
構成団体／経済産業省近畿経済産業局、国土交通省近畿地方整備局、国土交通省近畿運輸局、大阪府、大阪市、（社）関西経済連合会、大阪商工会議所、（社）関西経済同友会、（財）大阪観光コンベンション協会、（財）大阪21世紀協会

お問い合わせ
水都大阪2009実行委員会事務局（大阪21世紀協会内）
〒540-0032大阪市中央区天満橋京町1-1
大阪キャッスルホテル4階
☎06-7506-9460
FAX06-7506-9086
http://www.suito-osaka2009.jp

都心の水辺で遊び、楽しむ52日間

中之島公園会場（A）
水辺の文化座
アーティストによる工房や体験型アートワークショップなど、親子で楽しめる体験型プログラム『水辺の文化座』をはじめ、中之島を灯りで彩る参加型『灯りプログラム』、水の回廊を就航する船を装飾する『アート船プロジェクト』を展開します。

水辺の文化座

八軒家浜会場（B）
ウォーターカーテン上で光・水・音・映像を駆使して水都大阪の魅力を伝える幻想的なショー『ナイトプログラム』や、季節の野菜や全国の特産品などが並ぶ『朝市&リバーマーケット』など、船着場で楽しむプログラムです。

ナイトプログラム

中之島水辺会場（C）
土佐堀川左岸の川床を設置して川と美しい中之島を望む絶好のロケーションで料理を楽しむ『北浜テラス』、錦橋や難波橋などを光のアートで彩る『橋梁ライトアップ』など、水辺の景観を大人ムードで楽しみます。

錦橋ライトアップ

水の回廊（D）
ウォーキングと川船で水都大阪の魅力を再発見する『クルーズ&ウォーク』、地元協力で船着場とその周辺に賑わい空間をつくる『船着場プログラム』を展開します。

クルーズ&ウォーク

まちなか会場（E）
近代建築とアート作品のコラボレーション『水都アート回廊』、さまざまな分野の専門家による『水都記念シンポジウム』、大阪の素敵な場所を写真で募集する『大阪ステキ発見』など、まちとアートを楽しみます。

大阪・アートカレイドスコープ2008より

※上記は各会場のプログラムの一部です。
イラストおよび写真はイメージです。

大阪が変わる。

『水都大阪2009』連携イベント

水都大阪2009シンボルイヤー開幕イベント

大阪の水辺を舞台に、2009年度もさまざまなビッグイベントが予定されています。
とくに今年は『水都大阪2009』との連携で、より一層の盛り上がりが期待されています。

3月28日（土）スタート 大川周辺（OAP港～八軒家浜）

水都ルネッサンス大阪実行委員会、水都大阪2009実行委員会、大阪21世紀協会

大川に春を告げる『川開き式典（3月28日／11:00～OAP港、11:45～八軒家浜）』をはじめ、『朝市&リバーマーケット（28日／11:00～15:00／護岸公園）』、『八軒家浜アクアカフェ（3月28日～4月12日／八軒家浜桟橋）』、『八軒家浜界隈ライトアップ（3月28日～4月12日／八軒家浜桟橋、南天満公園）』、『こども桜クルーズ（3月29日、4月4日、5日／八軒家浜～約40分）』などを開催します。

恒例イベント

'09食博覧会・大阪

4月30日（木）～5月10日（日）
インテックス大阪（大阪国際見本市［南港］）
食博覧会実行委員会・（社）大阪外食産業協会・（財）大阪21世紀協会

4年に1度開催される日本最大級の食の祭典。7回目となる今回は、国内外の約400社が出展。「食を知り、食を楽しむ」をテーマに、大人から子どもまで幅広く楽しめる、多彩なプログラムが予定されています。
※詳細は本号裏表紙でご紹介しています。

第21回なにわ淀川花火大会

8月8日（土）
新御堂筋淀川鉄橋より下流国道2号線までの淀川河川敷
なにわ淀川花火大会運営委員会主催
（大阪21世紀協会ほか後援）

水の都のシンボル・淀川と、わがまちを愛する地元ボランティアスタッフが、周辺の企業や団体、商店、住民などからの寄付によって企画・運営。平成18年度からは後援団体も増え、オール大阪で盛り上げています。

天神祭 7月24日（金）・25日（土）／大阪天満宮および大川周辺

水都祭・第63回天神祭奉納花火

7月25日（土）／造幣局側桜ノ宮公園・大川一帯
天神祭奉納花火実行委員会主催

千年以上の伝統をもち、日本三大祭のひとつにも数えられる天神祭。本宮の25日には、メーンイベントの陸渡御・船渡御に加え、恒例の水都祭「天神祭奉納花火」が行われます。さまざまな花火が大川を色鮮やかに照らすと、祭は最高潮に達します。

第13回大阪・淀川市民マラソン

11月1日（日）／淀川河川公園・枚方地区（スタート・ゴール）
大阪・淀川市民マラソン実行委員会主催

フルマラソンとハーフマラソン（共にペア、団体あり）を種目にした市民マラソン。昨年は、総勢約7,100人のランナーが、爽やかな秋空のもと淀川沿いを駆け抜けました。

大阪文化の灯を守ろう！

2009年 大阪文化の行方を語る

武田佐知子（たけださちこ）**氏**
大阪大学理事・副学長、同大学院文学研究科教授・文学博士（日本古代史）、21世紀懐徳堂を推進

田中宰（たなかおさむ）**氏**
阪神高速道路株式会社代表取締役会長、大阪商工会議所ツーリズム振興委員会委員長

萩尾千里（はぎおせんり）**氏**
関西経済同友会常任幹事、株式会社大阪国際会議場代表取締役社長、元朝日新聞編集委員

集中と選択で文化を再構築

堀井　今や大阪に限らず、関西全域においても財政難のなかで文化事業予算がどんどん縮小される傾向にあり、強い危機感を持っています。大阪においても、あまりにもすべてが損得勘定や経済的価値に収斂させようとしている風潮があり、心配です。大阪ではこれまでも、経済危機がやってくると真っ先に文化や教育を犠牲にしてきた歴史があるからです。江戸時代に生まれた大阪町人の学問塾「懐徳堂」がその例です。明治2年、経済が疲弊し閉鎖を余儀なくされました。しかしやはり、大阪から学問探究の灯を消してはならないと大正5年に「重建懐徳堂」として復興され、現在、大阪大学によって第3次の「21世紀懐徳堂」が興されています。本当は連綿と学統をつなぐべきでした。私は、そうした文化の歴史的連続性こそが、未来に夢を語り紡ぎ、大阪人としての自信や誇りを生み出していくものであると思います。今、大阪・関西の文化の現状をどう見て、いかなる文化戦略をとるべきなのか。皆さんのご意見をお伺いします。

萩尾　世界中でグローバル化が進むなかにあって、都市が発展していくためには共通のルールを上手く使って他都市と共存していくための「普遍化」と、自らの存在感を出すための「個性化」が求められます。しかし大阪の場合、普遍化するばかりで、本来の個性が失われているように思えます。個性化こそは、文化力、つまり感性によってつくられるのです。大阪は1400年の歴史、京都や奈良などの周辺都市と連携してきたポテンシャルをもっているのですから、それらをもっと活かす感性を磨き、文化力を大切にすることが不可欠であると思います。

堀井　田中さんは中之島にお住まいですが、大阪の真ん中での暮らしはいかがですか。

田中　素晴らしいですね。まず夜の過ごし方がとても豊かになり

大阪では今、財政難によって文化事業予算が大幅に削減され、先人が長い歳月をかけて培ってきた文化の森が伐採されようとしています。設立以来「文化の力で大阪に活力を!」と活動を続ける大阪21世紀協会は、そうした状況に強い危機感を持ち、文化の灯を守ろうというメッセージを発信するとともに、新たな可能性を提案していきたいと考えています。そこでこの度、当協会主催「21cafe」において緊急座談会を開催。各界でご活躍の方々に、これからの大阪の文化戦略について、さまざまな提言をいただきました。

（2009年2月16日・大阪大学中之島センターにて実施）

春野恵子（はるのけいこ）**氏**
浪曲師。2003年・二代目春野百合子に弟子入り、若手浪曲ユニット『新星浪曲☆新宣組』など東西で活躍

佐藤徳夫（さとうとくお）**氏**
関西プレスクラブ企画委員長、「京都21世紀教育創造フォーラム」「京都教育懇話会」にも参画

司会：堀井良殷（ほりいよしたね）
財団法人大阪21世紀協会理事長

ましたね。これは人間をずいぶん文化的に変えるものだと思いました。オペラやオーケストラが聴けるし、歌舞伎や文楽も気軽に楽しめる。また、親しい仲間と盃を傾けながら、おしゃべりや議論の花を咲かせることもできる。講演会などにも結構参加するようになりましたね。国際女子マラソンがはじまると聞けば、すぐその現場に行けますし、長居陸上競技場で行われた世界陸上も2度行ってきましたよ。私は、そうして直に感じ、生活の中に溶け込んでいるものを文化として大事にしたいと思っています。ところで大阪では、工場は海外へ逃げ、企業の本社は東京に移り、大学も住民も郊外に行ってしまいました。こんなところに文化は残るのでしょうか。もうすでにかなりの文化の木々が枯れてしまったのではないでしょうか。いずれにしろ、100年に1度の経済危機といわれるなかで、雇用が守れなくなり、福祉や教育も削減しなくてはならない状況下で文化をどう考えるかという問題であることを、しっかり意識しておくべきだと思います。私はパナソニックに40年強勤めましたが、創業者の松下幸之助は「不況また良し」という言葉を残しました。つまり、不況は過去の栄光や慢心に警鐘を打ち、今を見直すチャンスであるというのです。その視点で申し上げると、私は文化施策に対して2つのことを考えなくてはならないと思っています。ひとつは「なぜこんな状態になるまで、我々は手を打つことができなかったのか」、もうひとつは「文化の何を伐採し、何を残そうとしているのか」。つまり選択と集中によって、どんな新しい文化をつくろうとしているのかを検討すべきでしょう。国や自治体の再構築が求められている時代にあっては、今まさに文化を再構築するチャンスであると思います。

我々の時代で潰してはならない

堀井　文化といっても人によってさまざまなイメージがあります。

大阪21世紀協会ではそれを「学術、芸術、技術、スポーツ」と定義し、このなかには生活文化も含めています。私は、文化は不易の文化と流行の文化があると思っています。流行の文化は移ろい変わりますが、不易の文化は長年にわたって築き上げてきた人類の遺産です。そうした不易の文化はつねに意識的なサポートが必要で、いったん消してしまうと二度と立ち上がれないものもあるでしょう。だから流行の文化と不易の文化をしっかり分けてフォローする必要があると思います。浪花節も大阪で生まれて長らく愛されている文化ですね。

春野　浪曲といっても、若い人たちにとってはテレビでやっていないのでぜんぜんイメージがないですね。私もこの世界に入る前は同じでした。しかし初めて寄席で生の落語を聴いて、テレビには映ってないけれど世の中には面白くて楽しい芸能がいっぱいあるんだということを知りました。映画やテレビなどの作られた映像とは違って、浪曲や落語、講談は、聴いている人の心のなかに映像をつくることができるすごいパワーをもっているんです。私は寄席通いをするなかで二代目春野百合子さんの浪曲に出会い、どうしても弟子入りしたくて6年前に東京から大阪にやってきました。大阪は、文楽や浪曲など、日本のさまざまな伝統芸能が生まれ染み付いたところです。私は今、そこに足をついて暮らしているだけで、いろんなことが吸収できるんじゃないかと強く感じています。一方、大阪の浪曲界の現状はかなり厳しくて、私たち若手の上が70～80代と大きく世代が開いています。しかも三味線を弾く曲師となると、わずか4人。最高齢が92歳の藤信初子師匠でその次が70代の岡本貞子師匠。その後はもう若手です。10年後の大阪の浪曲界を考えるとすごく不安ですね。

堀井　文楽の世界も、無形文化財である大夫さんや人形遣いさんたちとその後に続く若い技芸員の方々との年齢差が大きく、人材養成は大きな課題です。そうした人材養成費や文楽技芸員

懐徳堂　大正5年（1916年）に再建されたもの（写真提供（財）懐徳堂記念会）

大阪国際会議場（大阪市北区中之島）

小泉純一郎元首相らによる「桜の会・平成の通り抜け」プロジェクトのスタートを祝う植樹式（毛馬桜之宮公園／2005年1月8日）

歌舞伎船乗り込み（道頓堀川／2008年7月）

大阪文化の灯を守ろう!

の方々は、現在、国と大阪府、大阪市、そして財界からの助成によって賄われていますが、大阪府からの助成が毎年減少の一途にあり、非常に厳しい状況にあります。私たちの世代で人材の継続的な養成がままならないとなると、後世の歴史的審判を受けることにもなろうかと思います。このことは上方演芸資料を守り活用されているワッハ上方や、児童文学研究の貴重な資料を保存・活用されている大阪国際児童文学館とて同じことでしょう。私たちの世代の責任というものを、今一度考え、果たしていくべきであると考えます。

『大阪ガラス発祥の地』碑（大阪天満宮脇）

広報力を高め正しく伝える

武田　まさにその通りだと思います。ところで私たちが今、共通認識として「大阪文化」と呼んでいるのは、西鶴や文楽に代表される近世の文化であり、近代の大大阪時代からの文化です。しかし、日本全国で一般に大阪文化と呼ばれるものは何かといえば、「お笑い」や「たこ焼き」でしょう。そうした大阪文化への非常に歪曲され矮小化されたイメージによって、大阪人が自信と元気をなくしているのではないでしょうか。また、大阪に対する誤ったイメージを生んでしまったのは、大阪の広報のしかたが下手なのではないかと思います。誰かが声を大にして「大阪はそうじゃない」と言わなければなりませんが、これに関して最近痛切に感じたことをご紹介します。それは『天満切子』についてです。大阪は日本のガラスの発祥の地で、和漢三才図会（わかんさんさいずえ／1715年）にその記述があり、大阪天満宮脇にその碑が建っています。長崎に上陸したビードロやギヤマンの製造技術が大阪・天満に伝えられ、大阪で初めて吹きガラスや色付ガラスの製造がはじまりました。ところがこの事実は、日本全国でほとんど知られていません。いったん途絶えた薩摩切子を初めて復元したのも大阪ですが、宣伝上

文楽人形遣いの桐竹勘十郎さん（手前）と吉田簑二郎さん（奥）から、二人三番叟の人形指導を受ける子どもたち（大阪市立高津小学校）

天満切子

大川と中之島剣先公園

手な薩摩が薩摩切子の復刻版を作って大々的に売り出したため、日本のガラス工芸の中心地で生まれた天満切子が、薩摩切子を真似ているというような誤解を受けているのです。大阪人の広報下手からそうなったのかも知れませんが、とても悔しい思いをしています。私は大阪大学の広報担当として、また歴史研究者として、そうした大阪独自の文化を国内外に発信していきたいと思っています。

佐藤　日本人は自ら主張して何かを伝えるということが、基本的に苦手のようです。とくに大学。企業も強いとはいえない。新聞記者の側からいうと、情報発信のためにどれだけ汗をかくかということが大切です。さまざまな知的財産をもつ大学においては、難しい論文などを一般に分かりやすく翻訳して、今の時代感覚にあったものとして提供する努力が必要でしょう。企業にしても、広報戦略にあまり人もお金もかけない。ところで、先ほどもお話のあった懐徳堂のように、かつての大阪はとても風格のある歴史都市であったと思います。歴史都市の条件は「世界性、先進性、学術拠点性、自治能力、健全なコミュニティー」の5つだと聞いたことがあります。しかし近年の大阪を見ると、このいずれをも十分満たしていると実感できません。明治2年に懐徳堂が閉鎖されましたが、同じ年に京都では近代小学校が建てられ、明治の荒廃期に人づくりをスタートさせました。また、京都府の多額の予算を使って大阪から後の第三高等学校を誘致し、現在の京都大学の礎を築きました。こうした施策は大阪とは非常に対照的ですね。また、私は文化や伝統は継承されることが前提だと考えます。しかも単に守るのではなく、革新の連続によって保たれるべきものだと。しかし、大阪では経済優先に走るあまり、共に汗をかいて文化や伝統を革新的に高め守ろうという自覚が共有されていないように見えます。その意味で、大阪大学が旗を振っておられる「21世紀懐徳堂」運動は、これからの大阪を変える起爆剤になると期待しています。

武田　今おっしゃった21世紀懐徳堂こそが、一般に分かりにくいと言われている大学の研究などを社会に広く分かりやすくアピールするための窓口としての広報機能を担っています。大阪大学は産学連携が進んでいると言われますが、私たちは今、「社学連携」して大学の知財を社会にどう分かりやすく発信していくかということに取り組んでいます。そこで21世紀懐徳堂は、日本一の規模となった大阪大学のさまざまな活動の全体の窓口となって、教養講座をするだけでなく、大学で今何が行われているのかを目に見えるかたちで発信できる、仕組みづくりを進めています。そうした意味で、大阪大学が広報に非常に力を注いでいるということをお分かりいただきたいと思います。

文化の連続性が自信と誇りを生む

田中　堀井さんの「本当に大事なものを私たちの時代になくしてはならない」というご意見を聞いて、ヨーロッパを旅したときのことを思い出しました。不思議なほど、どの都市へ行っても、歴史遺産を守るために大変な人と費用と時間をかけていることが伺えました。自分たちの文化を懸命に守ろうとしている姿に、尊敬の念すら抱きました。そうした取り組みの積み重ねで、我々旅人を魅了する歴

工業都市時代のビスケット工場を文化拠点に再整備（フランス・ナント市）

新進アーティストの登竜門『アートストリーム』（サントリーミュージアム／2008年11月）

大阪の大学生がプロデュース『御堂筋学生音楽祭（大阪市中央公会堂／2007年9月）』

史遺産を残すことにつながっているのですね。

堀井　懐徳堂が明治2年に閉鎖された後、オランダ人化学者のハラタマ博士（K.W.Gratama:1831～1888）を中心とする舎密局（せいみきょく）という化学研究所ができました。これを発展させれば大学になったのですが、結局はこれも京都に追い出してしまいました。それが佐藤さんの話された第三高等学校で、後の京都大学となります。京都大学の総長は、舎密局が我々のルーツだとおっしゃっています。ハラタマ博士の銅像が大阪府警察本部の一角にありますが、私はその前を通るたびに悔しい思いをします。大阪が学問の砦を追い出したんだと。さらに後年、工場等制限法で再び大学をまちの外へ追い出してしまいました。私は今、そういう歴史を繰り返してはならないという思いを強くしています。私たちに自信と誇りを与えるものは、まさに文化と伝統の連続性に他ならないからです。

文化をプロデュースする人材を

萩尾　昨年12月に京阪中之島線の開通を記念して、大阪国際会議場主催でコンサート（加山雄三と大阪センチュリー交響楽団）を開催したところ、2754人収容のメインホールが満席になりました。そこでこれを機にメインホールに名前をつけようということになり、

大阪府民 880万人の文化財産!

財団法人大阪国際児童文学館

日本唯一の存在に海外も注目

北田彰 常務理事 談

当館の役割は大きく二つあります。一つは児童文学の総合資料センターとしての役割。毎年国内で発行される児童書や雑誌などを収集しています。現在約70万点の資料を活用・保存し、後世に伝えていきます。もう一つは、子どもと本をつなぐ活動の支援。例えば新刊書を当館専門職員が全て読み込み、お薦めの本を図書館司書や学校教員、読書ボランティアの方に紹介します。こうした役割と活動を担っているのは、全国でここだけ。海外からも注目されています。

私は、30年ほどまえに梅棹忠夫さんや山崎正和さん、小松左京さんらが集まって「中之島芸能文化センター構想」を打ち上げたときのことを思い出しました。この構想は実現しませんでしたが、西鶴劇場や近松劇場といった大阪文化の伝統を活かしたネーミングを思い出して、「なんだ、中之島芸能文化センター構想は大阪国際会議場で実現しているじゃないか」と気づいたんです。現在、メインホールは「近松劇場」、イベントホールは「西鶴ホール」にしようと検討しているところです。先ほど、大阪は広報が下手だというお話がありましたが、大阪には文化をしかけるツールがたくさんあるのに、上手にプロデュースされないために一般に知られていないのだと思います。ここで見習うべきは、宝塚歌劇をつくった小林一三です。人々の夢とロマンをかき立てながら、事業としてもちゃんと成功させる。今の大阪には、文化を守る一方で、そういうプロデューサーを育てていかなくてはならないと思います。そして新しい文化を掘り起こし、発展させていくムーブメントを起こすことが大事。そうでないと、いつまでたっても大阪には「お笑い」しかないと思われてしまいますからね。

堀井　勿論「お笑い」も文化のひとつなのですが、市民には、人類が築いてきた沢山の多彩な文化を楽しむ権利があります。子どものうちからそうした文化に親しみ、感性を養うために鑑賞する機会を得る。そうしていい観客を育てることで、伝統の革新作業にはね返していく。そのためのプロデューサーが必要なんですね。

知的ネットワークを活用

春野　まずは、浪曲を理解できる人が、将来本当にいなくなってしまうのではないかと不安です。例えば「左甚五郎」といっても若い人は知らないですね。浪曲を聴く上での共通認識がなくなりつつあるんです。また、浪曲を学校でする機会も非常に少ない。学校で教える音楽は譜面のある西洋音楽ばかりで、譜面にはできないけれど日本の伝統的な節（ふし）や声の出し方などはほとんど触れられません。日本の伝統芸能や音楽を知らずに育っていくなんて、本当にもったいないですね。子どもたちには、早い時期からそうしたものに触れさせてあげたいと心から思っています。

佐藤　子どもの教育は社会総ぐるみでといわれますが、大阪では企業や行政が教育現場と身近に結びついていないように思います。一方、大学や企業が

大阪府民 880万人の文化財産！

大阪センチュリー交響楽団

府民サービスを第一に考えた多彩な企画

出野徹之 常務理事兼事務局長 談

公立のオーケストラとして、大阪府民に対するサービスを第一に考え、活動しています。定期演奏会を手頃な値段で楽しんでもらったり、子どもや身体の不自由な方には、それぞれに合った楽しみ方を企画。小中学生に楽器体験をしてもらう『タッチ ジ オーケストラ』や、特別支援学校コンサート、小編成での府立病院の巡回演奏会などはいずれも大好評です。そうして55名の楽団員が、生の音楽を楽しみにされている方々のために、年間110公演とフル稼動しています。

大阪文化の灯を守ろう！

自律自走を！

コンパクトに集積している京都では、産学公が教育現場とも非常に密接に結びついているように思えます。例えば今年2月に「京都モノづくりの殿堂（上京区／京都市教育委員会）」がオープンし、京セラや日本電産、任天堂といった京都発祥の大手企業16社の創業の精神を子どもたちに学ばせています。また、京都市と京都精華大学が共同で小学校跡地に『京都国際マンガミュージアム』をつくり、マンガコンテンツ産業を振興するとともに、子ども向けにマンガ化された教材を使って、起業家精神や経営者の生きざまを学ぶ授業も進められています。こうしたことは大阪であまり聞いたことがありません。先般の関西財界セミナー（2月5日・6日／国立京都国際会館）においても、7つの分科会のうち教育や文化をメインテーマとするものがなかった。経営、経済、政治に関するものが多く、100年に1度といわれる経済危機においてはそれで当然なのかもしれませんが、こういう時代だからこそ、もっと文化について語り、身近なところで人づくりをしてほしいと思いますね。

田中　文化のプロデュースや連携という観点でいえば、京都の花街にも学ぶところがあります。お茶屋の女将は宴会のプロデューサーで、芸妓や舞妓はタレント、置屋はタレントプロダクション、見番はいわば旅行代理店みたいなもの。踊りを教える家元は学校であり、歌舞練場は大劇場。そしてもっとも大切なのが旦那、つまりパトロンです。そうした分業体制とチームワークに加え、花街文化を愛し守りたいという皆の気持があってこそ、今日まで継承されているんですね。

堀井　さきごろ大阪大学中之島センターで、大阪大学の鷲田総長やコシノヒロコさんたちの呼び掛けで、アーティストと社会を結び付ける『アートアッセンブリー』という催しがありました。こうしたことも文化のプロデュースだと思いました。

武田　大学の大切な使命のひとつに、学生を育て社会に送り出すことがあります。アートアッセンブリーは、そうした学生の実地トレーニングをしながらプロデュース力を養い、かつ大阪文化への貢献もするという一石二鳥、三鳥を狙ったものです。21世紀懐徳堂も、音楽会などに学生が主体的に活動してもらうことでプロデュース力を養い、演奏家と企業とのマッチングを図るなど、さまざまな試みの場になっています。

堀井　21世紀懐徳堂を窓口として関西の大学の知的ネットワークが張り巡らされ、社学連携の中心となって活躍する。それによってプロデュース能力が高まり、市民も創造的に参加できるムーブメントが起こると良いですね。関西財界セミナーでも道州制が議論されていますが、それが現実のものとなるためには、そうした関西の文化的ネットワークの構築が必要なのでしょうね。

萩尾　関西停滞の原因が中枢機能と自律性の欠如にあるという視点で、これをなんとかしようという経緯のなかで、早くから道州制の議論が起きました。とはいえ関西の自治体は道州制には消極的で、むしろ九州で熱心に議論されています。かつて関西経済同友会の代表幹事だった鳥井信一郎さん（当時サントリー社長・故人）が、「地域主権」ということを提唱されました。地方分権ではなく地域主権だと。地方が自律していないと、いつまでも東京の植民地なんですね。そんな状況で生き生きとした文化は生まれません。また、文化についてはあまり行政に頼ってはいけないと思います。行政はインフラに金を出すだけで、あとは口出ししない。だから文化のプロデューサー役は民間から適任者を出し、それを皆でバックアップする体制で臨むべきだと思います。大阪21世紀協会が設立されたときは、大阪だけではなく関西をもっと活性化しようという志に燃えた人たちで、すごい熱気を感じました。それを思うと今の大阪の状況は非常に寂しい。苦しい経済環境ではありますが、民間の力でやっていくことが必要だと思います。

佐藤　地域主権という意味においては、これからは大学が大きな

大阪府民 880万人の文化財産！

ワッハ上方（大阪府立上方演芸資料館）

大阪府民の誇るべき文化財産
伊東雄三 館長 談

大阪府が文化行政の一環として演芸資料館をつくる構想を立てたのが平成元年。以来20年間、府民などに呼びかけて、昔の演芸台本や舞台衣裳、レコードなど約5万7千点もの資料が寄贈されました。在阪の放送局からも昭和30年代から今日までの約2700もの演芸番組を無料で提供していただき、当館の演芸ライブラリーで閲覧いただけます。これらは大阪府民の誇るべき文化財産です。また、305席の公立の演芸・演劇ホールとして稼動しているのは大阪市内でここだけ。ワッハ上方は、上方演芸発祥の地・ミナミで、地域の方々をはじめ多くの方々に支えられているのです。

役割を果たすと思います。企業はすぐ東京へ本社を移しますが、大学はそうではありません。大学は地場産業、それも頭脳のある地場産業であるという視点で見れば、人材も含めてとても大きな知的ストックがありますね。近畿2府4県には、短期大学も含めて100を超える大学があります。知恵の時代といわれるなか、そうした大学がネットワークをつくり、知的ストックを活用することはとても重要なことでしょう。京都には50の大学が参画する『大学コンソーシアム京都』があります。関西プレスクラブでも、関西を牽引する知的ソースとして13の大学に賛助会員として加盟してもらっています。我々はそういう場を利用してできるだけ大学情報を発信したり、定例会でも経済人だけではなく、大学から人を招いてお話してもらっています。大阪大学の鷲田総長にも一度お越しいただきました。そこで阪大が市民と一緒に動きはじめたというお話をしていただき、私たちも大きな期待を持って見ています。

武田　ありがとうございます。大学が地場産業であるという視点に新鮮な思いをいたしました。また、大学に非常に熱い期待をもっていただいていることを、とてもうれしく思います。先ほど大学力は人材力に尽きると申しましたが、いい人材を得るためには偏差値ではなく、地域の活力が影響してきます。つまり、まちが魅力的であればあるほど、素晴らしい学生たちを引き寄せます。だからこそ大阪大学は、大阪の活性化に力を入れようとしているんです。また、地場産業としての大学も、これからはネットワークを組んでやっていく必要性を感じました。

堀井　田中さんは関西財界セミナーで、関西の各都市はそれぞれの地域でユニークな発展をしているけれど、バラバラではだめだとおっしゃっていますね。

田中　関西には大阪、京都、奈良、和歌山、神戸など、素晴らしいアイデンティティをもつ都市があるのに、残念なことにユニオンになっていない。個々バラバラで、ガバナンスもない。あげくには大阪文化は「お笑い」だなんて東京にきめつけられている。だから関西が立ち上がる意欲を示そうということで、関西財界セミナーで「初夢2020年・United States of KANSAI・関西合衆国」というプレゼンテーションを行いました。関西合衆国をつくればオリンピックだって、サミットだって誘致できます。今、日本全国でビジットジャパン1000万人というキャンペーンが展開されていますが、関西合衆国だけで1000万人はクリアできるでしょう。AU（アジア連合）の本拠地も大阪にもってこられる。そうすれば素晴らしい大阪に甦るんじゃないかという、夢のある話しをさせていただきました。

堀井　外国には、文化によって寂れたまちを憧れのまちに変えた例がたくさんあります。ナント（フランス）、ビルバオ（スペイン）、サンアントニオ（アメリカ）、セントポール（アメリカ）などは、重厚長大産業の衰退で錆び付いたまちを、文化の力で見事に甦らせ、世界的知名度を得るに至りました。文化というのは不要不急な穀潰しではなく、都市再生の切り札になるという証明です。ナントのエロー市長は、「市民の文化に対する意識があって、芸術や文化を鑑賞する市民が育ったことが鍵だ」といっています。

萩尾　行政の役割は自ら先頭に立って文化をつくることではなく、それが育つ環境整備を行う、いわば旦那なんですね。そこで民が自由に文化活動に専念する。行政は旦那役に徹して、能力ある民間人にプロデュースを任せれば、そこに中心となって活躍する人が出てくるでしょう。そうすることで都市が活性化していく。例えば新緑や紅葉の美しい時季の御堂筋を10日間ほど開放して、そ

こでいろんなことをする。そうして感性を刺激することで、新たな文化も育っていくのだと思います。

春野　浪曲師の現状を考えると、私たちはプロデュースから広報、タレントまでをすべて自分たちでしなければなりません。

佐藤　美術館とか音楽ホールとか、文化を固定して見過ぎている面はないでしょうか。大阪には、革新を起こして新しい文化を提示していくモデルが少ないと思いますね。京都国際マンガミュージアムでは、日本のマンガアニメは世界を席巻する日本文化だと紹介しています。開館して2年間で50万人ほどの来場者があったのですが、その10～15%が外国人観光客です。マンガ文化が新たな観光資源にもなっているんですね。さらにそのポテンシャルを生かして、コンテンツ産業や観光ビジネスとリンクさせています。ビジネスマインドの進んだ大阪であれば、そうした新しい分野を先取りすることもできるはずです。マンガにしろ、グルメにしろ、新しい文化を取り込んだビジネス戦略をぜひ大阪で実践してもらいたいですね。

武田　アニメ制作は大阪が本場なんですよね。しかし、やはりその広報が弱い。そういうことも含めて、大阪大学は大阪を発信することにも力を注いでいかなくてはならないと痛感しました。

田中　ぜひ言っておきたいことがあります。先ほど私は関西合衆国の話しをしましたが、素晴らしいアイデンティティをもっている関西がどんどん疲弊する姿を見るのは本当に残念です。ここで大事なのは、ユナイテッド（連合）とガバナンス（自治）です。大阪21世紀協会は1982年に『大阪21世紀計画』をつくられて、「世界都市・大阪をつくろう」「文化立都」をというスローガンを立てられました。大阪21世紀協会の今後が注目されている今、私はこの際大阪を越えて、関西の21世紀協会になってほしいと思います。そうして関西の各都市が連携することこそ、必要ではないかと思っています。引き続き頑張っていただきたいと思います。

堀井　ありがとうございます。皆さんのお話を伺って、是非ともやらなくてはならないことが二つあると思いました。ひとつは26年間、文化で都市を活性化しようと活動を続けてきましたが、この歩みを止めてはならない。そして今後は、大阪はもちろん関西の文化への広がりを志向して活動する重要性を感じました。もうひとつは大学や知的ネットワークの役割の重要性をあらためて認識しました。『21世紀懐徳堂』などと連携して、大阪・関西の文化による都市再生を推進していきたいと思います。本日はありがとうございました。

大阪府民 880万人の文化財産!

財団法人文楽協会

世界遺産『文楽』の技芸を伝承・普及

下村進 次長 談

大阪発祥の文楽は世界遺産にも登録され、大阪府民はもとより日本人の財産ともいうべき芸能です。私たちは無形文化財である『文楽』の伝承・普及を目的とし、伝統芸能を伝承するために大夫や三味線、人形遣いの文楽三業といわれる技芸員の活動を振興しております。そうした費用は国、大阪府、大阪市、財界の支援によるもので、これによって大阪の伝統芸能の灯を絶やさないように日々精進しています。

大阪府民 880万人の文化財産!

国立文楽劇場

開館25周年を迎え10万人集客をめざす

秋田憲良 支配人 談

当劇場は昭和59年にオープンして以来、今年で25周年。この間、文楽の鑑賞者層をさらに広げるため、通常の公演以外に子ども対象の『夏休み親子劇場』や高校生対象の『文楽鑑賞教室』、『社会人のための文楽入門』などを行ってきました。その成果があって、最近は若い皆さんの中にも文楽に対する興味が深まってきています。平成21年度は文楽公演で年間10万人以上の集客を目指して頑張っています。

義経千本桜（よしつねせんぼんざくら）
（写真提供：国立文楽劇場／撮影＝北畑）

4年ぶり開幕間近！
美味しくて、元気になる日本最大級の「食」の祭典

インテックス大阪正面ゲート（イメージ）

3号館（イメージ）

国内外のおいしさを一堂に集めた『'09食博覧会・大阪』が、いよいよゴールデンウィークに開催される。日本最大級の食の祭典といわれるこのイベントは、1985年から4年ごとに開催。過去6回の累計入場者数は353万人を超え、前回は66万人超。毎回多くの家族連れやカップルなどで賑わっている。

7回目となる今回は、レストランや食品メーカーなど国内外の約400社が出展。「食を知り、食を楽しむ」をテーマに、楽しい食生活を創造するための、心と技を集めた「宴」が展開される。1号館は中国・瀋陽雑技団によるスリリングな妙技を披露する『食博劇場』、2号館は世界のお酒と一緒に音楽や舞踊を楽しめる『世界ときめき館』、3号館は世界五大陸の「コナモン料理」をワンコイン（100円）で味わえたり、小さな子どもたちが食に親しみ遊べるミニチュアレストランのある『美味ふれあい館』、4号館は食空間を彩る商品や食の安全を支える技術などを紹介する『生活うるおい館』、5号館は華道家・假屋崎省吾さんのトークとデモンストレーションが楽しめる『宴もてなし館』、6号館は国内のご当時グルメを集めた『故郷にぎわい館（6-A）』と大阪名物や銘酒などを集めた『故郷にぎわい館（6-B）』。インテックス大阪の全館が、食べて、飲んで、体感する「食」のテーマパークとなる。

「会場は広く、それぞれの館で趣向を凝らしていますので、自分なりのテーマとタイムスケジュールを作ってご覧いただくといいですね。とくにショーは人気ですので、整理券の配付時間を確かめて入手はお早めに」とは食博実行委員会の広報担当。「世界の粉もんを食べ尽すぞ!」とか「ショーを観ながら一杯」とか、まずはお目当てを優先するのが上手に楽しむコツ。今年の大型連休は、大阪が世界に誇る食文化を堪能してみるのも面白い。

THE INTERNATIONAL FESTIVAL
UTAGE 2009 IN OSAKA

'09食博覧会・大阪

4月30日（木）～5月10日（日）
インテックス大阪（大阪国際見本市［南港］）

主催：食博覧会実行委員会・（社）大阪外食産業協会
・（財）大阪21世紀協会

2005年開催のようす

■入場料（税込み）
・大人（高校生以上）前売り1500円＜当日2000円＞
・子供（小・中学生）　前売り　750円＜当日1000円＞

■問い合わせ
食博覧会実行委員会
TEL 06-6536-1020　FAX 06-6536-1124
（受付時間　9:00～17:40／土日祝除く）
http://www.shokuhaku.gr.jp

財団法人 大阪21世紀協会
ホームページ http://www.osaka21.or.jp
発行日／平成21年3月25日
発行・編集／財団法人大阪21世紀協会 〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町1-1 大阪キャッスルホテル4階 TEL.06(6942)2001 FAX.06(6942)5945
発行人／佐々木洋三　編集統括／高橋英子　編集協力／株式会社インサイト　印刷／株式会社NPCコーポレーション
本誌は再生紙を使用しています。